PROCEEDINGS

The VIth International Symposium

SEP. 5 ~ 9, 1978.

NATIONAL ACADEMY OF SCIENCES
REPUBLIC OF KOREA

3529 005

always with 다, 티 (or 데). Incidentally BS [tʃa] is never represented with 자, 차, but with 쟈, 챠, which indicates that the contemporary Korean 자, 차, were [tsa] [ts'a] respectively.

Before concluding my remarks, I have to explicitly state that my discussion so far has been based on the assumption that the transcriber 成希顔 spoke the Seoul dialect. I would like to request Korean colleagues to investigate his biography in order to clarify his native dialect.

スージ碑文の一解釋

——とくに最初の三行について——

護　雅夫

(一) いわゆるスージ(Sūdži) 碑文は十一から成るが，その最初の三行は，

1. uyγur: yirnta: yγlqr: qn: ta: kl……
2. qirqz: uγli: mn: buyla: qutlγ: yrγn:
3. mn: qutlγ: bγa: trqn: ügä: buyrqi: mn:

と transliterate される。同碑文を發見し，最初に研究したラムステット(G.J. Ramstedt)は，上の三行を，

1. uyγur yirintä yaγlaqar qan ata käl(tim).
   Uyγur の土地における，Yaγlaqar-Qan-Ata, 來たれるものなり，我れ。
2. qïrqïz oγlï män, buyla qutluγ yarγan
   Qïrqïz の息子なり，我れ。Buyla-Qutluγ-Yarγan
3. män, qutluγ baγa tarqan ügä buyruqï män.
   なり，我れ。Qutluγ-Baγa-Tarqan-Ügä の buyuruq なり，我れ。

と轉寫・翻譯し，[1] ほぼつぎのような注記を加えた。「yγlqr は不明の語である。これにつづく qan ata とあわせて名稱(Name) として理解さるべきであろうか。トムセン(V. Thomsen)によると，yaγlaqarと讀まれねばならない」[2]，さらに，「被葬者たる主人公がそこに生活し，また，彼がそこへ來た

1) G.J. Ramstedt, Zwei uigurische Runeninschriften in der Nord-Mongolei, Journal de la Société Finno-Ougrienne xxx, 3, Helsinki, 1913, SS. 4-5. ただし，ラムステットが j,y と寫した文字を，本稿では，それぞれ，y,ï で寫した。
2) Ramstedt, op. cit., S. 6.

『ウイグルの土地にて』，彼は埋葬されもしたのである。（中略），八四〇年に，今度は，彼ら(ウイグル)がキルギズの襲撃をうけた。ここに埋葬されたのは富者・官僚(buyuruq, buyla qutluγ yarγan) で，彼は一首領 (qutluγ baγa tarqan) に服屬していた」[3]と。

ついで，ベルンシュタム(A. Bernštam)は，第一行を，

Uyγur yärintä yaγlaqar qan ata käl(ti.)

Uyγur の土地へ Yaγlaqar qan 父が來たれり。

と轉寫・翻譯した上，「テキストから，Yaγlaqar qan がキルギズの qaγan であったことは明らかである」といい，「死者がそこから出たキルギズについて言及されているのから考えると，この碑文は，キルギズが當地域を征服したのち——八四〇年以後——の時期のものである」，また，「周知のようにウイグル王朝の復興は八六二年のことであるから，このような碑文がキルギズ出身者のために建てられる可能性は，八四〇年から八六二年まで二二年の間に存在したと考えられる」と結論した。[4]

Yaγlaqar qan をキルギズの qaγan に比定する，このベルンシュタムの意見は，キセリョフ(S.V. Kiselev) の支持を得た。[5]

そののち，マーロフ(S.E. Malov)は，まず，「傳統的なすぐれた翻譯」として，ラムステットに始まる翻譯を，それに私見[6]を加えつつ紹介したのち，

3) Ramstedt, op. cit., SS. 8-9.
4) A. Bernštam, Social'no-ekonomičeskij stroj orxono-enisciskix tjurok VI-VIII vekov, Moskva-Leningrad, 1946, ss. 52-53.
5) S.V. Kiselev, Drevnjaja istorija južonj Sibiri, Moskva-Leningrad, 1951, ss. 563-564.
6) S.E. Malov, Enisejskaja pis'mennost' tjurkov, Moskva-Leningrad, 1952, s. 85. マーロフは，第三行の Qutluγ baγa tarqan ögä buyruqī を，「幸福な Baγa-tarqan の Ögä-buyuruq」と譯し，ナデリャエフその他の編纂にかかる『古代チュルク語辭典』もこれに從っている。V.M. Nadeljaev, D.M. Nasilov, E.R. Tenišev i A. M. Ščerbak(red.), Drevnetjurkskij slovar', Leningrad, 1969, s. 121. しかし，上揭の一句は，「Qutluγ baγa tarqan という ögä の buyruq」の意味にとるべきあろう。後述，および G.Clauson, An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish, Oxford, 1972, p. 387 を參照されたい。

第一行について，これ以外につぎの如き解釋も可能であることを示した。

（イ）yirintä の -täを(Lokativ-) Ablativ 格語尾ととるならば，Uyγur の土地より，Yaγlaqar-qan-ata, 來たれり，我れ」の意となる。

（ロ）その上，ラムステット以來，ata(「Yaγlaqar-qan とともに複合的名稱の一部」または「父」) と見なされてきた taを(Lokativ-) Ablativ 格語尾と解してよいならば，「Uyγur の土地より，Yaγlaqar-qan(地名) より，來たれり，我れ」，または，「Uyγur の土地より，Yaγlaqar-qan のもとより，來たれり，我れ」などと譯しうる。

マーロフは，ほぼ以上のように指摘してから，「Yaγlaqar qanがキルギズの qaγan であったことは明らかである」というベルンシュタムおよびキセリョフの見解をするどく批判した。[7]

ところが，ズーエフ(Ju. A. Zuev)は，yirintä の -täのみならず，Yaγlaqar-qan につづく ta(-ta) をも，Dativ 格語尾の如く解し，さらに，Yaγlaqar-qan について，大略つぎのようにのべた。

ペリオ(P. Pelliot) とハミルトン(J.R. Hamilton)とによると，Yaγlaqar は，『舊唐書』卷一九五廻紇列傳などの中國史料に，「〔廻紇の〕可汗の姓」として見える藥羅葛に當たる。從って，スージ碑文の主人公がウイグル人であるならば，問題の Yaγlaqar を彼の名稱(imja) と考えることにいささかの障害もない。しかし，彼は，「Qïrqïz の息子なり，我れ」と自稱するように，ウイグル人ならぬキルギズ人であった。從って，Yaγlaqar は彼の名稱ではありえない。こう見てくると，ウイグルの可汗氏族の名前 Yaγlaqar にqanという稱號が付され，その Yaγlaqar-qanが同氏族の居住地の名稱に轉化したものと思われる。つまり，この Yaγlaqar-qan は地名 (nazvanie mestnosti) なのである。

ズーエフはこうした理由から，スージ碑文の第一行を，「Uyγurの土地へ，Yaγlaqar-qanへ，來たれり，我れ」と翻譯した。[8]

7) Malov, op. cit., ss. 85-90.
8) Ju. A. Zuev, Kirgizskaja nadpis' iz Sudži, Sovetskoe vostokovedenic, 1958, No, 3, s. 134.

私は，いま簡單に紹介してきたラムステット以來の諸說に對し，かねがね疑問を抱いていた。疑いの第一は，qan のあとの ta(ata) を「名稱の一部」として(ラムステット，マーロフ)，または「父」の意味（ベルンシュタム）にとることに對して，第二は，Yaγlaqar-qan を地名と考える点について（マーロフ，ズーエフ)，そして，第三は，yirintä の -tä と，qan につづく ta (-ta) とを，ともに Dativ 格語尾と見なす意見に關して（ズーエフ）である。

ます，私は，qan のあとの ta は，これを -ta と轉寫して(Lokativ-) Ablativ格語尾(マーロフ) または Dativ 格語尾（ズーエフ）ととるべきではなく，ata と轉寫せねばならぬと思う。しかし，その ata は「名稱の一部」でも「父」を示すのでもなく，動詞 at- の Konverbum形ではあるまいか。[9]

つぎに，マーロフがあげたように，qan の語をふくむ地名がないでもない。[10] しかし，當面の Yaγlaqar-qan は，もっとも素直に考えて，やはり，ウイグルの Yaγlaqar(藥羅葛) 氏族出身の qan の意味に理解すべきであろう。

さらに，古代チュルク語の -tä, -ta は Lokativ-Ablativ 格語尾であって，Dativ 格語尾ではない。

私が，スージ碑文の第一行に關して從來發表された轉寫・翻譯に疑念をすてきれなかった主な理由は，大略以上の如くである。

私は，一九七四年六月，榎博士の特別の配慮により，ハーヴアード-エンチン研究所の援助をえてレニングラードを訪れたさい，クリャシュトルヌィ (S.G. Kljaštornyj) と，スージ碑文についても意見を交換した。そこではじめて，私は，クリャシュトルヌィがこれに關して私とほぼ同じ疑問をもち，その見解を，すでに一九五九年に發表している[11]ことを知った。何とも申し

9) これについては，きわめて簡單ながら，すでに指摘しておいた。護雅夫「クリャシュトルヌィ，リフシツ共著『セヴレイ石碑』」『東洋學報』五五一四，一九七三年一二〇頁，註(11).

10) Malov, op. cit., s. 89.

11) S.G. Kljaštornyj, Istoriko-kul'turnoe značenie sudžinskoj nadpisi, Problemy vostokovedenija, 1959, No. 5, Moskva, ss. 162-169.

ひらきようのない迂闊さである。

(二) クリャシュトルヌィは，その論文のなかで，問題の箇所について大體つぎのようにしるした。

スージ碑文の第一行の翻譯に當たって，いままでその正しい理解を妨げてきた理由は，ata を「父」の意味にとる点にある。古代チュルク-ルーン文字諸テキストで「父」を示す場合には，ata ではなくて，つねに qaŋが用いられている。當該箇所の ata は，「父」を現すのではなく，動詞 at- に -a の付されたその副動詞形と考えられ，動詞 at- は「射る，射殺する，(矢で) 殺す」を意味する。この副動詞形は，古代チュルク文字諸テキストでは，人稱語尾をもつ動詞で示された他の動作に時間的に先行する動作を現すのに用いられる。古代キルギズ諸碑文（イエニセイ諸碑文）では，この副動詞形の直接補語は Nominativ 形で表現されるのが普通であり，それに Akkusativ 格語尾が付されるのはむしろ例外である。こう考えると，スージ碑文の最初の三行は，つぎの如く翻譯される。

1. Uyγur の土地にて，Yaγlaqar-qan を (矢もて)殺して，(ここへ) 來たれり，我れ。
2. Qïrqïz の息子なり，我れ。Boyla Qutluγ yarγan
3. なり，我れ。Qutluγ baγa tarqan(なる) 支配者 (ögä) の官僚(buyruq) なり，我れ。

クリャシュトルヌィは，これにつづく八行にも譯文を付したのち，このように翻譯すると，「この銘文が，キルギズのモンゴル高原征服に參加したものの一人に關係し，モンゴル高原・シベリアにおけるキルギズ國家の建設にかかわる諸事件を語ったものであることが明らかになる」といい，ついで，碑文にしるされた人物について，大意以下のように說く。

「八四〇年に，彼(キルギズの君主) は，叛亂をおこしたウイグルの將軍句錄未賀（句錄莫賀。Külüg Baγa tarqan) と連合して，ウイグルの首都オルドゥバリクを占領した。ウイグルの可汗は戰死し，シベリア・モンゴル高原の地域には，新しい內陸アジア帝國（八四〇—九一七）が誕生した。これ

らの諸事件のエピソードの一つについて語っているのが，スージ銘文の最初の諸行なのである。上述の通り，ウイグル國家において可汗の稱號を帶びたのは，Yaγlaqar 氏族出身のカンたちであった。ただしこれには例外があった。その例外というのは，Qutluγ-qaγan（骨咄祿可汗。七九五－八〇五）と，その息子の Külüg Bilgä-qaγan（倶錄毗伽可汗。八〇五－八〇八）とで，これら兩人は Ädiz（跌跌）氏族から出ていた。この銘文の主人公，キルギズの司令官 Boyla Qutluγ yaγan は，『Uyγur の土地にて，Yaγlaqar の qan を殺した』というが，この Yaγlaqar の qan とは，中國史料にウイグルの最後の可汗として傳えられている螶馺にほかならぬ。(中略)，Boyla Qutluγ yaγan は，自ら，Qutluγ baγa tarqan という支配者(ögä)の buyruq(buyuruq) であると稱している。(中略)，Qutluγ baγa tarqan は，Boyla Qutluγ yaγanの直接の君長であるとともに，國家――古代ウイグル領――の一部の支配者(ögä) であったと目されねばならぬ。(中略)，スージ銘文の Qutluγ baγa tarqanは，キルギズを援助してウイグル國家を擊滅したウイグルの將軍 Külüg baγa tarqan（句錄未賀，句錄莫賀）に比定されうるように思われる。彼が，キルギズでは知られていない稱號 baγa tarqan を帶びているのも，この推定の正しいことを示すであろう。qutluγ《幸福な》と，külüg《名聲ある》との兩語は形容語として用いられ，また，これらが相互に代用されるか，或いは(完全な稱號のなかで兩語とも使われる場合には) うちの一つが省略されるのはまれでないようである」。[12]

クリャシュトルヌィは，こうして，スージ碑文中の「Qutluγ baγa tarqan という ögä」を，中國史料に見えるウイグルの將軍句錄未賀[13](句錄莫賀)[14]――Külüg baγa[15]――に比定する。この見解に從うと，モンゴル高原

12) Kljaštornyj, op. cit., ss. 163-165.

13)『舊唐書』卷一九五迴紇列傳。

14)『新唐書』卷二一七上回鶻列傳上。

15) クリャシュトルヌィは，句錄未賀(句錄莫賀)を Külüg Baγa tarqan と寫しているが，管見のおよぶかぎり，句錄未賀が tarqan（達干）であったことを示す證據はない。もっとも，倶陸莫〔賀〕達干(倶錄莫賀達干。Külüg Baγa tarqan) と稱する人物が中國史料に見えているが，これと句錄未賀とは無關係である。

におけるウイグル國家の崩壞，そしてキルギズ國家の成立ののちも，ウイグルの將軍――句錄未賀――がキルギズ領内で依然勢力を有していたということにならざるをえない。クリャシュトルヌィが，「このように比定するならば，八四〇―八四七年におこったウイグル諸族の東トルキスタンへの移住によって，ウイグル人住民がモンゴル高原に一人もいなくなってしまったわけではないという結論に達しうる。セレンガ川流域の古代ウイグル領は，あいかわらず，多數の軍隊を擁するウイグル人總督の支配下にあったのである」[16] というのはこのためである。

クリャシュトルヌィは，ほぼこうのべたのち，第四行以下に關しても獨自の見解を展開しているが，それらについての私の考えは別稿にゆずり，ここではただ，上に紹介した限りにおけるクリャシュトルヌィ說に對する私見をしるすにとどめる。

(三) 私がまず問題としたいのは，クリャシュトルヌィが，ウイグルの可汗たちのうち，彼のいわゆる Qutluγ-qaγan（骨咄祿可汗。七九五－八〇五）と Külüg Bilgä-qaγan(倶錄毗伽可汗。八〇五－八〇八)[17] と，――この二人だけを Ädiz（跌跌）部族出身者と考え，骨咄祿に先行する可汗たちは勿論，倶錄毗伽のあとに立ったものたちをもすべて，Yaγlaqar(藥羅葛) 氏族の出身と見なしている点である。彼が，スージ碑文の Yaγlaqar-qan をウイグル最後の可汗である螶馺に比定したのも，この可汗を Yaγlaqar氏族から出たものと考えたからにほかならない。

ところで，例えば『新唐書』卷二一七上回鶻列傳上に，

〔貞元〕十一年(七九五)，〔奉誠〕可汗死，無子，國人立其相骨咄祿爲可汗，以使者來，詔秘書監張薦持節册拜愛滕里邏羽錄沒蜜施合胡祿毗伽懷

16) Kljaštornyj, op. cit., s. 165.

17) クリャシュトルヌィのいわゆる Qutluγ-qaγan(骨咄祿可汗) すなわち第七代懷信可汗が七九五年から八〇八年まで在位したこと，また，同じくクリャシュトルヌィのいうところの Külüg Bilgä-qaγan（倶錄毗伽可汗）が第八代保義可汗と同一人物で，その治世が八〇八－八二一年であることについては，山田信夫「九姓回鶻可汗の系譜――漠北時代ウイグル史覺書1――」『東洋學報』三三－三・四，一九五一年を參照されたい。

信可汗，骨咄祿本跌跌氏，小孤，爲大首領所養，辯敏材武，當天親〔可汗〕時，數主兵，諸酋尊畏，至是，以藥羅葛氏世有功，不敢自名其族，而盡取可汗子孫內之朝廷。

というのによっても明白な如く，骨咄祿(骨咄祿將軍)[18]は，身は跌跌(Ädiz)部族の出身でありながら，藥羅葛(Yaγlaqar) 氏族のものが占めるべきであった可汗位についた。「九姓回鶻可汗の系譜」を研究された山田信夫氏によると，「此の〔第七代〕Qutluγ Säŋün (骨咄祿將軍) の時に至って實質上ウイグル國內に於ける Yaγlaqar 氏の支配的地位は覆えされた譯で，此の時，此の氏族に屬する年少の貴族達は全て唐朝廷に入侍せしめられてしまった」，[19] また，「七代目になると既に血統は他部族につながるものが現れている。そしてそれ迄の可汗の血緣者，血統上將來可汗位に卽き得る可能性のあるものは全て追放された」[20]という。

第七代可汗——唐から懷信可汗に册立された——について卽位した合俱錄毗伽可汗は，唐の册立をうけて保義可汗となったが，[21] クリャシュトルヌィは，この第八代可汗を，前に紹介したように，第七代可汗の「息子」と考えている。しかし，「〔第八代〕保義可汗が，前代懷信〔可〕汗に對して，血緣上如何なる關係にあったかどうか，と云うことになると殘念ながら明かでない」[22]というのが眞相である。

保義可汗のあとに立った可汗たちについては，山田氏に從えば，「以下，その國瓦解迄の約二十年間に四代を數えるが，九代目が前代の何にあたるか

18) 『唐會要』卷九八回鶻の條。
19) 山田信夫，前揭論文，九五頁。
20) 同上，一〇九頁。ただし，安部健夫氏によると，「一見，本來のヤグラカルの勢力は根こそぎ片づけられたようにも思われるが，事實はむろんそうでなかった。唐廷に送られたのは文字どおり，ある世代以上のある年令層のものに限られていた。(中略)，奉誠自身には少なくも男子の世繼ぎはなかったが，しかしその血につながる親・兄弟・親族一統は老幼を問わず——天親以上についても幼少でないものは，すべて漠北に殘されていたと見ねばならない」という。安部健夫『西ウイグル國史の研究』京都，一九五五年，二六六—二六七頁。
21) 山田信夫，前揭論文。
22) 同上，一〇八頁。

が不明のほか，その他は皆同族のものである。何れにしろ，可汗繼襲に關しては特別の變事もなかったことは唐人の所傳の單調而して明確なところからも十分察せられるので，ただ末期に近づくと共に，その國內諸勢力爭いの傀儡的存在たる色を濃くするのみである」[23]という。私は，山田氏のこの結論の正しさを信ずる。

以上の如く見てくると，我々は，クリャシュトルヌィのように，第七代，第八代の兩可汗だけを Ädiz 部族の出身と見なし，第六代以前および第九代以後の可汗たちを，最後の可汗である盧駁をもふくめて，すべて Yaγlaqar氏族出身者と考えることはできない。

もっとも，山田氏の指摘の如く，「〔第八代〕保義可汗が，前代懷信可汗に對して，血緣上如何なる關係にあったか」，また，「九代目が前代の何にあたるか」が不明である上に，モンゴル高原のウイグル國家が瓦解したのち西方へ移動したウイグル人の一派が建てた甘州回鶻の可汗たちが夜落紇(夜落隔。Yaγlaqar) 氏族の出身であった[24]とすれば，ウイグル國家の可汗位は，クリャシュトルヌィの說くように，Ädiz 部族の手から間もなくふたたび Yaγlaqar 氏族のそれに移ったとも考えられなくはない。しかし，第八代可汗以後「可汗繼襲に關しては特別の變事もなかったことは唐人の所傳の單調而して明確なところからも十分察せられる」。すなわち，モンゴル高原のウイグル國家における第八代目可汗以後の可汗の系譜に斷絕はなく，可汗位が，依然 Ädiz 部族のものによって占められていたと見なすのがごく自然であろう。胡三省は，『資治通鑑』卷二三六唐紀五二順宗永貞元年十一月の條の「回鶻懷信可汗卒，遣鴻臚少卿孫杲臨弔，册其嗣爲騰里野合俱錄毗伽可汗」の一句に注して，

自懷信立，回鶻藥羅葛氏絕矣，此後史皆書册其嗣，以表懷信子孫也。

という。この注のうち，「『此後史皆書册其嗣』の事實を今では明証できない」。[25] しかし，「ウィグル帝國の國姓は，かつては狹義のウィグル系のヤグ

23) 同上，一一〇頁。
24) 同上，一一二頁，註(8)，安部健夫，前揭書，二六九頁。
25) 安部健夫，上揭書，一七九頁。

ラカル〔藥羅葛〕であったが，(中略)，懐信カガンの出現以來，廣義のウィグルつまりトクズオグズ系のアチ〔阿咥＝鉄鉄〕になった」[26] ということは，安部健夫氏の說かれるとおりであろう。甘州回鶻の可汗が Yaγlaqar氏族の出身者で占められることになったのは，ウイグル國家の瓦解のさいの動亂期またはそののちにおこった，可汗の系譜の變化に由來すると考うべきではあるまいか。

私は，このような理由から，第七代の懐信可汗——骨咄祿または骨咄祿將軍——以後におけるモンゴル高原のウイグル國家の可汗たちはすべて Ädiz 部族に屬していたと思う。従って，私は，スージ碑文第一行の Yaγlaqar-qan を，ウイグル國家最後の可汗たる盧駁に比定するクリャシュトルヌィの說に従うことができない。もはやいうまでもないことながら，盧駁も，Yaγlaqar 氏族ならぬ Ädiz 部族の出身であったからである。

つぎにとりあぐべきは，クリャシュトルヌィが，「qutluγ《幸福な》と，külüg《名聲ある》との兩語は形容語として用いられ，また，これらが相互に代用されるか，或いは（完全な稱號のなかで兩語とも使われる場合には）うちの一つが省略されるのはまれでないようである」といい，これを一つの——しかし重要な——根據として，スージ碑文第三行の「Qutluγ baγa tarqan という ögä」を，中國史料に見えるウイグルの將軍句錄未賀（句錄莫賀）——Külüg baγa——に比定する点である。

しかし，我々は，山田信夫氏が，「ウイグルの可汗に對する種々の呼稱」を綿密に檢討したすえ，qaγan または bilgä-qaγan という稱號の前に付される語は，「『külüg』にしろ『qutluγ』にしろ，同じ様な美稱であるとは云え，例外もあるけれど，各可汗夫々差別はあるのである」[27] という結論に達せられたことを知っている。この結論は「可汗に對する種々の呼稱」に關するそれであるが，ことは，官僚その他の呼稱についても同樣であったと考えてよかろう。とするなら，スージ碑文の「*Qutluγ* baγa tarqan という ögä」を，

26) 同上，二六六頁。
27) 山田信夫，前揭論文，九九頁。

中國史料の句錄未賀（句錄莫賀），つまり *Külüg* baγa に當てるのは，すこぶる疑わしいといわざるをえない。

以上によって，スージ碑文の最初の三行に對するクリャシュトルヌィの解釋にはかるがるしく従えぬことが明らかかと思う。では，如何に考うべきか。

(四) 第一の Yaγlaqar-qan のあとの ta を ataと 轉寫し，この ata を，動詞 at- の Konverbum 形と見なすべきことは，前にしるしたとおり，私のかねがね考えていたところで，これについては，クリャシュトルヌィの意見は正しいと思う。ただし，彼のように，Yaγlaqar-qan at-を，「Yaγlaqar-qan を（矢もて）殺す」と解してよいかどうかははなはだ疑わしい。

at- に「射る」という意味のあることはたしかである。しかし，その場合に，at- の前におかれる Nominativ 形の語は，ほとんどすべての例において，その射られる矢または武器であって，射撃の目標・對象ではない。[28] 私が，クリャシュトルヌィが Yaγlaqar-qan at- に與えた「Yaγlaqar-qan を（矢もて）殺す」という翻譯に疑念をいだく理由はここにある。

at- がもともと「投げる」を示すことはいうまでもないが，これから轉じて，それは「追う，追い拂う，放逐する」[29] を意味する。私は，いま問題の Yaγlaqar-qan at- は，「Yaγlaqar-qan を追う（追い拂う，放逐する）」，従って，Yaγlaqar-qan ata kältim は，「Yaγlaqar-qan を追って（追いつつ），來たれり，我れ」と譯すべきであると思う。

こう考えてよいとすると，スージ碑文の主人公 Boyla Qutluγ yaγan は，「Uyγur の土地にて，[30] Yaγlaqar-qanを追って（追いつつ），來た」

28) W. Radloff, Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte, I, 's-Gravenhage, 1960, SS. 446-447. Sprachwissenschaftliche Ergebnisse der deutschen Turfan-Forschung, II, Leipzig, 1972, S. 467. Nadeljaev i drugie (red.), op. cit., s. 65. Clauson, op. cit., p. 36.
29) Nadeljaev i drugie (red.), op. cit., s. 65.
30) yirintä の -tä を(Lokativ-) Ablativ 格語尾と見なして，uyγur yirintä を「Uyγur の土地より」と翻譯できなくもない。しかし，このスージ碑文の建設地自體が「Uyγur の土地」であることからすれば，ここは，やはり「Uyγurの土地にて」の意味にとるべきであろう。

「Qïrqïz の息子」である，ということになる。

つぎに注目されるのは，この Boyla Qutluγ yarγan が，「Qutluγ baγa tarqan という ögä」の buyruq であったという点である。まず，yarγan は，「裁判官，判事 (sud'ja,[31] judge[32])」に相當する官稱號であるといわれるから，Boyla Qutluγ yarγan とは，「Boyla Qutluγ という裁判官(判事)」の意にほかならぬ。また，ögä は，「大體，顧問官(Counsellor) に當たるチュルクの高官の稱號で，ムスリム時代には，アラビア語の wazīr (宰相) という稱號にとって代られた」[33] と說かれている。中國史料にしばしばあらわれる「頡于伽斯」は il ögäsi の音を寫したもので，「國の宰相または顧問官」を意味する。[34] さらに，buyruq は，動詞 buyur- (「命令する」) から派生した名詞で，元來，「(何事かを爲すべく) 命ぜられたもの」をあらわし，古くは「文武兩面にわたる特殊の任務を遂行するように qaγan から命ぜられたすべての人物を示す一般的用語」，ひいては「將校 (officer)」[35] の意であるという。中國史料の「梅錄」はこの buyruq の音寫であると考えて萬誤りない。yarγan, ögä, buyruq の語義を以上の如く見てくると，「Boyla Qutluγ という裁判官 (判事)」は，「Qutluγ baγa tarqan という宰相ないし顧問官」の buyruq，つまり，彼から「何事かをすべく命ぜられたもの」であるという結論に達する。

では，その「Boyla Qutluγ という裁判官(判事)」が「爲すべく命ぜられた」「何事か」とは一體何であったか。私は，それは，「Uyγur の土地にて，Yaγlaqar-qan を追う (追い拂う，放逐する)」ことであったと考える。Boyla Qutluγ yarγan の yarγan が普通には「裁判官(判事)」と譯されていることは前述したとおりであるが，當面の場合は，Boyla Qutluγ は，「裁判官(判事)」という特殊の官職にあったのではなく，むしろ，より一般的に，

31) Malov, op. cit., s. 85.
32) Clauson, op. cit., p. 963.
33) Clauson, op. cit., p. 101.
34) ibid.
35) Clauson, op. cit., p. 387.

「罰を決めるもの」「罰を與えるもの」[36] であり，その「罰」こそ，「追放」ではなかったかと思われる。

いままでの考察に誤りなければ，つぎのようにいえる。スージ碑文の主人公である Boyla Qutluγ という yarγan (「罰を與えるもの」) は，Qutluγ baγa tarqan という ögä (「宰相または顧問官」) の buyruq (「命令をうけたもの」) として，その命に從い，Yaγlaqar-qan を「罰する」ため，「Uyγur の土地にて，Yaγlaqar-qan を追って (追いつつ)，來た」「Qïrqïz の息子」である，と。逆にいえば，*ögä* (「宰相また顧問官」) である *Qutluγ* baγa tarqanは，Boyla Qutluγ という自分の buyruq である「Qïrqïzの息子」に命じ，「Uyγur の土地にて，Yaγlaqar-qan を追わせた」ということになろう。

ところが，他方，前に，(三) で引用した『新唐書』回鶻列傳の記事，また，そのほかに例えば『資治通鑑』卷二三五唐記五十德宗貞元十一年四月の條の，

> 回鶻奉誠可汗卒，無子，國人立其相骨咄祿爲可汗，骨咄祿本姓跌跌氏，辯慧有勇略，自天親〔可汗〕時，典兵馬用事，大臣諸酋皆畏服之，既爲可汗，冒姓藥羅葛氏，遣使來告喪，自天親可汗以上子孫幼穉者，皆內之闕庭。

などという叙述から，我々は，骨咄祿(Qutluγ) という「相」が，藥羅葛(Yaγlaqar) 氏族の手から跌跌 (Ädiz) 部族のそれに可汗位を奪って第七代可汗として即位し，可汗の子孫を盡く取ってこれらを唐の朝廷に納めた(『新唐書』)，より正確には，「天親カガンから以上の子孫で幼ないものたちは，すべてこれを唐の宮廷に納めた」[37] ことを知る。ここでいわゆる「可汗の子孫」「天親カガンから以上の子孫」が藥羅葛(Yaγlaqar) 氏族に屬していたことはいうまでもない。しかも，「其の相たる骨咄祿(Qutluγ)」は，山田氏の考證によれば，「頡于伽斯(il ögäsi)」[38] つまり「國の ögä (「國の宰相また

36) Nadeljaev i drugie(red.), s.240. 本書には，yarγan の條に，「刑吏，刑罰を執行する人物」の譯が付されている。
37) 安部健夫，前揭書，二六六頁。
38) 山田信夫，前揭論文，九四頁。

は顧問官」)」であった。

片や「Yaγlaqar-qan を迫う」べく命じた *Qutluγ* baγa tarqan という *ögä* つまり「宰相または顧問官」，片や Yaγlaqar 氏族出身の「幼ないものを取って唐の宮廷に納めた」*Qutluγ* という「國の *ögä*」つまり「相」。かれこれ考えあわすならば，スージ碑文第三行の「Qutluγ baγa tarqan という ögä」とは，中國史料に見える骨咄祿という頡于伽斯——Qutluγ という il ögäsi——，「其の相たる骨咄祿」その人に當たるのではあるまいか。私は，一つの解釋として，この說を提唱したいと思う。

(五) もっとも，こうした私見に，まったく問題がないわけではない。

まず，スージ碑文第二行で，ウイグル人 Qutluγ baγa tarqan という ögä の「命令をうけた」Boyla Qutluγ が，自ら「Qïrqïz の息子なり，我れ」と稱している点があげられよう。すなわち，私見にして從うべしとするならば，骨咄祿が第七代可汗として即位した貞元十一年(七九五)ごろ，キルギズ人がウイグル領內に居住していたという結果にならざるを得ないからである。

ところで，黠戛斯がウイグル國內の混亂に乘じてこれを襲い，開成五年(八四〇)にウイグル國家を崩壞させたことは周知の事實であるが，それ以前にウイグルと黠戛斯とが戰鬪を交えなかったといえば嘘になる。すなわち，例えば『舊唐書』廻紇列傳に，

〔乾元元年(七五八)〕九月甲申，廻紇使大首領葢將〔軍〕等謝〔寧國〕公主下降，兼奏破堅昆五萬人，宴於紫宸殿，賜物有差。

といい，『新唐書』回鶻列傳上に，これと同じ事實を傳えて，

〔乾元元年〕，〔回紇〕又遣大首領葢將軍與三女子謝婚，并告破堅昆功。

としるし，『資治通鑑』巻二二四唐紀六二文宗開成五年九月の條に，

初，伊吾之西，焉耆之北，有黠戛斯部落，即古之堅昆，唐初結骨也，後更號黠戛斯，乾元中爲回鶻所破，自是隔閡不通中國。

と見えているからである。堅昆とは，qïrqïz (結骨，黠戛斯) のおそらくは單數形 *qïrqïnの音寫ではないかと思われる。「堅昆即ち黠戛斯」が「乾元已

來完全に回紇の勢力下に盤伏していた」[39] とすれば，「文獻的に證明はできぬが」「このとき，實際にその族人の一部が俘虜として〔ウイグル領內へ〕連れさられた」[40] ということは十分に考えられる。ウイグル人 Qutluγ baγa tarqan という ögä の麾下にあった「Qïrqïz の息子」Boyla Qutluγとはそのようなキルギズ人ではなかったか。[41]

つぎに，中國史料によれば，前にあげた二例が示すように，骨咄祿という頡于伽斯，「相」は，奉誠可汗に「子」がなかったために，「國人」の推戴をうけて可汗となり，そののちはじめて，「可汗の子孫」「天親可汗より以上の〔可汗の〕子孫の幼稚なる者」を「盡く取りて」「みなこれを闕庭に內めた」という。これに對して，スージ碑文に從うと，Boyla Qutluγ が「Uyγur の土地にて，Yaγlaqar-qan を追いて(追いつつ)，來た」とき，また，同碑文を建てたさいには，彼の「直接の君長」[42] は「Qutluγ baγa tarqan という ögä」と稱しており，可汗號を帶びてはいない。これが第二の問題であり，これをどう理解すべきか。

さて，骨咄祿は，「口前も達者なれば，荒ら事にもむくといった重寶なたちで〔辯敏材武(辯慧有勇略)〕，アルプ＝クツルック＝天親カガン〔七八〇—八九年〕のときから，兵馬の權を收めて政事にもたずさわって來た。大臣や

39) 田阪興道「中唐に於ける西北邊疆の情勢に就いて」『東方學報 東京』 一一-二，一九四〇年，一八一頁。

40) 安部健夫，前揭書，一五六頁。

41) 『資治通鑑』巻二二四唐紀八二憲宗建中元年八月の條に見える張光晟の上奏文の一節に，「回紇本種非多，所輔以强者，葛胡耳」とある。田阪興道氏は，この記事その他を引用し，「葛胡というのは別に，九胡とも謂われ，九姓胡即ちイラン人を指すことは疑いない。(中略)，回紇は大蕨吐蕃からもその實力を見縊られている有樣である。かかる弱小な人口でよく百年間覇權を維持したのは何故であろうか」と自問し，「張光晟の言によると，それは全く九姓胡の力の樣に思われるけれどもそれのみではあるまい」と自答された。田阪興道，前揭論文，二〇一頁，註11。ウイグル國家という場合，それに，狹義のウイグル部族，それと連合した諸部族——踈勒(Ädiz) もその一つである——，さらに，九姓胡(イラン人，とくにソグド人) がふくまれていたのは周知の事實であるが，私は，これらのほかに，本文で觸れた黠戛斯などからの捕虜も考慮されねばならぬと思う。

42) Kljaštornyj, op. cit., s. 165.

諸酋長たちは，だれしもこれには一目も二目も置いていた」[43] といわれ，また，山田氏の指摘の如く，彼は「當時，ウイグル國内に於て軍政兩面の實權を握っていたもので，内にあっては il ügäsi(!)[44] であり，外に出ては北庭派遣軍の將として吐蕃と角逐したもの，すべてのベグ達のうちの第一人者であった」。[45] 天親(七八〇—七八九)，忠貞(七八九—七九〇)，そして奉誠(七九〇—七九五) 三可汗の治世，足かけ十六年間における，骨咄祿のこのような赫々たる名聲，軍民兩面における實力を思うとき，彼は，奉誠可汗の沒した直後，或いはその末年，彼がまだ可汗として即位せず頡于伽斯，「相」だったときに，自らの名聲，實力を背景に，藥羅葛氏族一門のものの「追放」という擧に出たというのも，あながち無稽の沙汰とはいい難いのではあるまいか。ただし，そう考えるにしても，スージ碑文に，Qutluγ baγa tarqan の命令によって Boyla Qutluγ が「追放した」といわれる Yaγlaqar-qan が何者を指したものか，必ずしも明らかでない。中國史料は奉誠可汗の「死」——おそらくは自然死——を傳えるが，まことは，彼に「追放された」ので，Yaγlaqar-qan とはこの奉誠可汗なのであろうか。それとも，奉誠可汗の死後，誰か藥羅葛氏族出身者が可汗として立ち，それが Yaγlaqar-qan と稱されているのであろうか。さらに或いは，「可汗の子孫」「天親可汗より以上の〔可汗の〕子孫の幼稚なる者」を Yaγlaqar-qan と呼んだものであろうか。私は，必ずやこの三つに一つであろうと思うが，史料は默して語らず，これを確かめるすべとてない。

はじめに紹介したように，スージ碑文について，從來，多くの學者が研究を發表してきたが，その何れもが必ずしも人を納得させるに足るものではなかった。本稿で提唱したのは，それらの先人の說とならんで，こうも考えられようかという，私の一つの解釋にすぎない。博雅の叱正を期待して，榎博士の華甲を祝う小文の結びとしたい。

43) 安部健夫，前揭書，一七〇頁。
44) いままでしるしてきたとおり ögä が正しい。Clauson, op. cit., p. 101.
45) 山田信夫，前揭論文，九四頁。

Some Problems Concerning Manchu Phonology

—— On the Vowel ū ——

Baeg-in Seong
Myongji University
Seoul

1. Research on literary Manchu has mainly been concerned with Manchu written in Tongki Fuka Sindaha Hergen (TFSH), the script with dots and circles. Literary Manchu was also written in Tongki Fuka Akū Hergen (TFAH), the script without dots and circles. Although TFAH is an incomplete phonetic script, literary Manchu written in this script is a valuable source of material that should be deeply investigated when doing research on the Manchu language. In spite of this, literary Manchu written in TFAH has not drawn much attention from Manchu scholars.

It is generally believed that the only difference between TFSH and TFAH is that TFSH has dots and circles and that Manchu written in TFAH is an older stage of Manchu than Manchu written in TFSH. However, the difference in the orthography between Manchu in TFSH and Manchu in TFAH goes beyond the fact that one has dots and circles and the other does not. In fact, there are some differences in the usage of the letters and in the principles of orthography between TFSH and TFAH. Also, both Manchu written in TFSH and Manchu written in TFAH reflect the language of almost the same period. Therefore, we can expect to learn many facts about the phonology of